

城下町都留 芭蕉句碑めぐりスタンプハイク開催

期 間 9月1日(木)～10月31日(月)

コース(歩行時間2時間30分 約7.5キロ)

都留文科大学前駅(スタート/スタンプ)→田原の滝(スタンプ/句碑)→都留市商家資料館・屋台展示庫→びゅあ富士(スタンプ/句碑)→円通院(スタンプ/句碑)→東漸寺(スタンプ/句碑)→城南公園(句碑)→勝山城址→谷村町駅(ゴール/スタンプ)

参加資格 スタート駅までの交通機関が電車利用者に限ります。

参加特典

スタンプ押印の方には松尾芭蕉記念切手、硬券付記念ポストカード、ミュージアム都留、芭蕉月待ちの湯割引クーポンをもれなくプレゼントします。

※イベントスタンプラリーに併せて、俳句コンテストを開催します。歩いた後は、一句詠んで、ゴールで応募。見事選ばれた優秀作品には豪華賞品(ホテルハイランドリゾート食事券、富士急ハイランドフリーパスなど)が当たります。優秀作品は駅などに掲示します。

問合先 産業観光課 観光振興担当

富士急富士吉田駅 ☎0555(22)7133

都留市野球連盟硬式部

桂クラブ90周年記念事業

「欽ちゃん球団」

茨城ゴールデンゴールズ」来る!

日時 10月30日(日)
場所 楽山球場

問合先

桂クラブ

90周年実行委員会
☎(45)6696

事務局 杉山



健全育成シリーズ(170)

『子どもの言葉』



小学校低学年を担当している。子どもたちの感性は、固定概念にとらわれず自由奔放である。時には楽しく、時にはドキリとさせられる。最近気になるのは人を否定したり、心が痛むような残酷な言葉が簡単に使われることである。たぶん意味をよく知らずに、また考えずに使っているのだろう。

例を挙げてみる。

①カラスがどかなかった話

教師「カラスが道の真ん中にいてちつとまでいてくれなくてね。クラクションを鳴らしても無視されちゃうし、近づいていったらぎりぎりの所でやっとなんちと跳んでどいてくれたんだけど、その時にね、カラスにジロリと睨まれちゃった。」

児童「ひいちゃえばよかったじゃない。」

②交通安全の話

教師「飛び出しをしないでね。」
児童「ううん、おれ飛び出す。」

児童「じゃあ、飛び出してひかれちゃえば。」

③取っ組み合いの喧嘩の理由
児童「死ね、と言われた。」

別の児童「ゲームごっこをしてただけで、ゲームではこの技を仕掛けると必ず死ぬのに、こいつはちつとも死なないから。」

④ほめたんだけど

教師「〇〇君は字がきれいだね。」
児童「でも、しゃべるのは下手なんだよ。」



子どもたちには、思いやりのある優しい人になってほしいと願っている。言われた人

がいやだと思ったり、他の人が聞いていて不愉快だと感じたりするような言葉は使ってほしくないと言われ伝わっている。しかし、なかなか消えてくれない。責任転嫁するわけでもないが、これはテレビの影響も大きいのではないかとと思う。人の欠点を挙げ連ねて笑いのネタにしたり、笑いを取るためにちよつとした失敗にも罵声を浴びせたり、見苦しい場面がよく出てくる。毎日見ている「慣れ」が怖いと思う。子どもたちは頭も心も柔らかいのでどんどん吸収する。「あれはひどいね。」なんて批判してみたりするのだがテレビにかなうはずがない。思いやりのある優しい子は、きつい言葉に傷つきやすい。今はそれらを跳ね返すたくましさも必要であるが、両方身に付けるのはなかなか容易ではない。

⑤授業を早く終わって
教師「休み時間、3分サービス。」
児童「やったー先生、太っ腹。」
別の児童(小さい声で)「それって、先生に失礼じゃない?」
確かに太ってるが…。こんな会話で幸せを感じている。

毎月第1日曜日は「家庭の日」

毎月第3日曜日は「青少年を育む日」 青少年育成都留市民会議編集委員